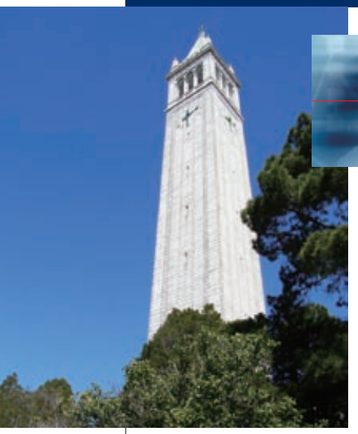


世界の有力大学の国際化の動向 ④

カリフォルニア大学バークレー校

学生の人種構成の多様化が促す大学の国際化

船守美穂 東京大学 国際連携本部特任准教授

アメリカの私立大学の紹介が続いたが，今回はアメリカの州立大学の国際化を紹介したい。

カリフォルニア大学バークレー校は全米屈指の州立の高等教育機関である。カリフォルニア大学の10の分校のうち最高峰の大学とされる。各種の大学ランキングで米国の私立大学が上位を席捲するなか，多くのランキングでベスト5に入るなど，州立大学にしてその名声と地位を堅持している。後に触れる1959年に承認，1960年に開始されたカリフォルニア高等教育マスタープランが，カリフォルニア大学の競争力の形成の発端となったと言われる。

州立大学と私立大学とでは運営形態が大きく異なる。大学としての意思決定に着目すると，私立大学では理事会のメンバーが愛校心の強い卒業生で占められるのに比べて，州立大学ではメンバーが州の規定によって定められる。カリフォルニア大学についていえば，州知事であるアーノルド・シュワルツネッガー氏が州憲法第9条9項に基づき，大学の26名の評議員のうち12年任期の評議員18名を任命する。残りの任期1年の評議員は，州知事，副知事，議会の代表，監査官，同窓会会長と副会長，学生だ。総長を含む大学執行部の任命権はこの理事会にある。

高等教育について必ずしも理解が深いとは限らない評議員が，大学運営について決定権を有することが諸悪の根源であるということは，州立大学関係者からよく指摘される。州政府からの運営費が年々削減され，州から交付される運営費が大学の総予算の3割をすでに下回ってしまった現状において，大学の運営について州政府から口を出されるぐらいであれば，運営費を拒否し，私立大学になってしまった方がよい，という声すらある。

このように大学運営に関わる意思決定が学内関係者から縁遠いところで行われていることもあり，カリフォルニア大学バークレー校は大学運営に関して戦略的意図をそれほど持たない。自由気ままなカリフォルニア・スタイルが学内に浸透している。5カ年計画や財政計画といったものは存在せず，その場その場で判断がなされる。

そのような訳でカリフォルニア大学バークレー校には紹介すべき国際戦略は存在しない。しかし一方で，学内構成員の人種が加速度的に多様化しており，これに応じて大学の在りようが変化してきている。今回はこのような人種の多様化が促す大学の国際化について紹介したい。

学生の4割以上がアジア系

2007年1月，ニューヨーク・タイムズが「丘の上のリトル・アジア」と題する記事を掲載し，話題を呼んだ。カリフォルニア大学バークレー校の入学者の46％がアジア系で，バークレーがアジア天国になっていると紹介したのだ。

実際，カリフォルニア大学バークレー校の2007年の学生の人種構成を見ると，学部・大学院いずれにおいてもアジア系の学生の比率がカリフォルニア州平均あるいは全米平均より圧倒的に高い。アジア系の人口は，全米平均で4%，カリフォルニア州でも12％しかいないのにもかかわらず，バークレー校では35％もいる。学生の3分の2を占める学部生にいたっては42％がアジア系だ(図1)。

ニューヨーク・タイムズに取材を受けた中国人学生によると，キャンパス内では中国語があふれ，外国人であるといった孤立感は感じないという。逆に，黒人系やヒスパニック系の学生が肩身の狭い思いをしている。カリフォルニア州はヒスパニック系の人口が36％と多いにもかかわらず，学内のヒスパニック系学生の人口は10％のみなのだ。黒人系の学生にいたっては3％しかいない。アジア系の人種が「現代のユダヤ人」となりつつある，と記事でも指摘されているように，アジア系の家庭に多くみられる学力至上主義や立身出世主義がやっかみの対象となっている。

このような状況の背景には，カリフォルニア大学バークレー校の入学選抜が，人種や性別などのバランスを考慮せず，学力のみを基準としていることによる。このため，勤勉なアジア系の学生が多く入学しているのだ。しかし，バーゲナー学長がニューヨーク・タイムズからの取材で指摘しているように，このような選抜基準は州の規則に基づいたものだ。

1996年，カリフォルニア州では住民投票によって州憲法を改正し，公的機関が人種・性別・民族の属性を加味して対応することを禁じた。以降，大学は学生の学力に応じて対応することとなり，結果として，白人およびアジア系住民の入学率が伸びた。ヒスパニック系および黒人系住民の入学率は下がったが，他方でこれら学生の卒業率は上がった。

カリフォルニア州では，この法改正による逆作用への批判の意も含め，1996年以降を，「ポスト住民投票事項209時代(post-Proposition 209 era)」と呼ぶ。

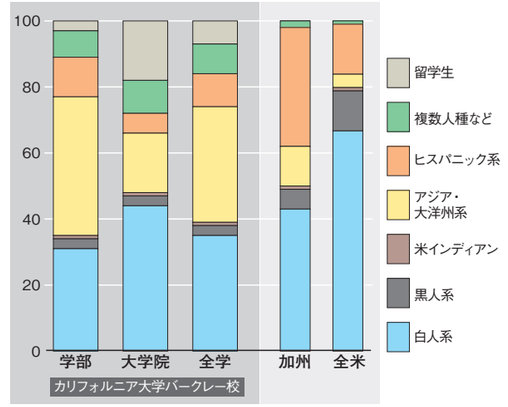
アジアを細かく分類し，実態を把握する

州の規則がこのような状況の背景にあるとはいえ，カリフォルニア大学バークレー校は州立大学であるため，カリフォルニア州の人口構成から大きく歪んだ学生の人種構成は批判の対象となる。そもそも中央アジアから東アジア，大洋州まで含む「アジア・大洋州」という分類が広すぎる。

批判をかわし，また，学生の実態を正確に把握するため，カリフォルニア大学はカリフォルニア州に先駆けて2007年11月に，次年度から入学する学生についてアジア系と大洋州系を分けて登録すると発表した。また，それら分類内の民族別小分類も細分化される。

たとえば，アジア系内の民族別小分類はこれまでの7分類から17分類に分けられることとなる。中国(台湾除く)・台湾・インド・パキスタン・日本・韓国・フィリピン・ベトナム・モン族・タイ・カンボジア・ラオス・バングラデシュ・インドネシア・マレーシア・スリランカ・その他である。

図1 UCBと加州・全米の人口分布（人種別）(2007年)



(出典) UCBデータ：CAL STATS 2007　全米・加州データ：米国勢調査 (US Census)

これらの人種や民族属性のデータは入学選抜では考慮されないが，留年率や卒業率などの分析に使用され，大学運営のための検討の材料となる。

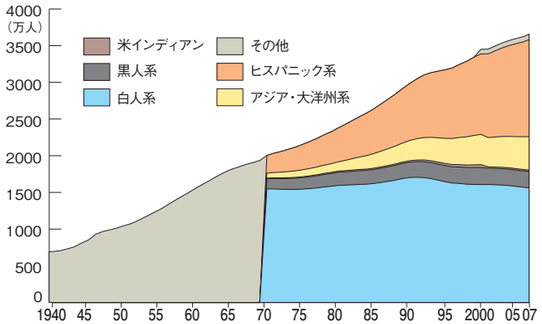
たとえば，アジア系と大洋州系住民の25歳以上の学士号保有率を比較した場合，前者は49％，後者は15％と大きく異なる。アジア系と大洋州系とを分けて統計を取ることによって，正確な現状把握と，きめ細かい教育を提供することができるようになるのだ。

自分のルーツを探す2世，3世

学生の人種構成の多様化の影響は随所に現れる。たとえば，外国語教育や外国大学との学生交流プログラムなどだ。これらのプログラムには，中華系の学生が中国語を学び，中国への留学を希望するといった現象が現れている。2世，3世たちが自分のルーツを求めているのだ。

カリフォルニア州には全人口の2％前後にあたる移民が毎年流入してきており，人口は1970年からすでに2倍近くに膨れあがっている(図2)。同州の外国出生人口は2000年の国勢調査によると州民の26.2％にも上る。これは全米トップで，20.4％で2位のニューヨーク州を大きく引き離す。さらに，これらの移民による出生もあり，カリフォルニア州の人種構成は過去30年ほどで大きく変化した。1970年代には8割近くい

図2 カリフォルニア州における人口増加（人種別）（1940-2007年）



（出典）米国勢調査（UC Census）および加州統計より作成

た白人が，2000年には5割を割り込み，代わりにヒスパニック系人口が1割強から3割にまで増加している。アジア系や複数人種の混血人口も増加している。

人種構成の変化は，州民の教育水準や健康保険への加入率，世帯の所得，ひいてはカリフォルニア州の経済活動と税徴収能力に大きく影響を及ぼす。このため，カリフォルニア州の人口統計は，州の財務局が担当する。

ここ数年は移民の流入が落ち着きつつあり，過去3年は人口の年増加率が1.5％を割り込んだ。カリフォルニア州では2世，3世が主役の時代になったと言われている。カリフォルニア大学バークレー校の各地域研究センターの研究者は，その国の出身者で構成されることが多いそうである。また，たとえば8米国の中国系財閥が中国研究センターに，アルメニア政府がアルメニア地域研究センターに，といった寄付も多いという。カリフォルニア州の2世，3世達が，カリフォルニア大学にどのような変化を促し，さらにはどのような大学の担い手になっていくのか，興味深い。

留学生比率の上限の設定

ところで，図1でカリフォルニア大学バークレー校の留学生比率が全学で7％しかないことに気がついただろうか。学部の留学生比率は3％，大学院は17％である。本稿で紹介した，アジア系の学部学生が4割以上いる，というのは米国籍の学生達のことである。

カリフォルニア大学は州立大学である。州民に高等教育を提供するために設置されているので，州外から受け入れることのできる学生の規模には制限が設けられている。学部段階で受け入れることの出来る州外の学生は全学部生の3％までである。しかも，この3％の中に，留学生も含まれているのだ。

カリフォルニア大学元総長であったキング教授に話を伺ったところ，大学側としては留学生をさらに受け入れたいと思っている。また，カリフォルニア州の経済にとっても留学生の増加は望ましい。しかし，他方では，大学は州の財源でまかなわれており，年々増え続ける州の高等教育人口を吸収する必要がある。安易に規則を改正し，留学生を増やすことは州民の反発を招きかねない。カリフォルニア大学は世界有数の大学であり，カリフォルニア州民からの入学希望者も多い。このため，学部段階の州外学生比率の上限に関する規則を改正することは難しいのだ。

カリフォルニア高等教育マスタープランの効用と制約

カリフォルニアの州立の高等教育機関の制度設計の根幹をなす「カリフォルニア高等教育マスタープラン」（1960年開始）は全米のみならず世界に広く知られている。当時，カリフォルニア大学学長であったクラーク・カー教授が，向こう15年間で3倍に拡大すると予想されていた高等教育人口を，限られた州予算の範囲内で吸収するために発案したものである。具体的には，それぞれの機能が特定されないまま野放図に乱立していた州の高等教育機関を表1の3分類に分類し，大学間の機能やプログラムの重複を防ぎ，効率化を図った。

このマスタープランは単なる機能分類あるいは財政の効率的使用以上のものを生み出した。この分類ができたことによって，各大学はそれぞれの設置目的に応じた教育を提供することに専念できるようになり，大学間の協力と競争が生まれた。それと同時に，学生および教員の間に健全な競争が生まれ，これがカリフォルニアの高等教育の競争力を生み出す源泉となったのだ。この成功モデルが現在では全米に広がり，多くの州でこのマスタープランの示す高等教育制度の枠組みが採用されている。また，世界各国からもカリフォルニアの高等教育の競争力について学ぶために視察に訪れる者が絶えない。

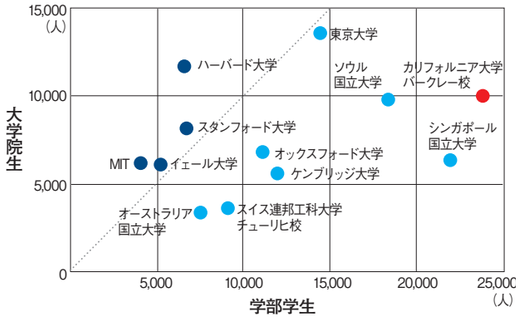
表1 カリフォルニア州高等教育機関の類型

「カリフォルニア高等教育マスタープラン」より

大学分類	University of California（UC）	California State University and Colleges（CSU）	California Community Colleges（CCC）
機能	エリート型	マス型	ユニバーサル型
大学数	10校	23校	109校
使命・役割	州の中心的研究機関	実践的分野及び教員養成が主たる目的	高校卒業生及び成人一般を対象に職業教育，学部前半の教育を提供
	学部教育 大学院（博士課程）	学部教育 大学院（修士課程）	4年制大学進学課程職業技術課程 教養・生涯学習課程
入学者	高校成績上位12.5%	高校成績上位33.3%	高校卒，18才以上無選抜入学

（出典）カリフォルニア高等教育マスタープラン

図3 世界の有力大学の学部生・大学院生構成比



マスタープランでは表1に示すように，それぞれの類型の大学が受け入れなければいけない高校卒業者の規模を定めている。カリフォルニア大学に則して言うと，同大学は毎年の高校卒業者のうち上位8分の1（12.5％）を受け入れなければいけないことになっている。カリフォルニア大学の分校が徐々に増え，現在では10の分校があるといっても，これは相当の数である。

このため，カリフォルニア大学バークレー校は，ハーバード大学やMITなど米国の他の有力私立大学に比べて圧倒的に学生数が多い。学部，大学院を合わせると3.4万人もの数になる。それに比べ，MITは学生数が1万人，MBAなどの専門職大学院で学生数が多いハーバード大学ですら1.8万人程度である。しかも，カリフォルニア大学バークレー校は学部生が全学生の7割を占める。米国の他の有力私立大学の多くが大学院の比重の方が大きく，学部生の割合が4割前後に留まるのに比べると雲泥の差だ。カリフォルニア大学バークレー校の教育負担が重いのが分かるだろう（図3）。

さらに，カリフォルニア大学は学部後期課程においてカリフォルニア・コミュニティ・カレッジ（CCC）の学生に，一学年の3分の1にあたる人数を受け入れなければいけない。このため，学部前期課程と後期課程の学生数の比率は40:60と定められている。2年間で高等教育が修了するCCCの学生に4年間の高等教育へのアクセスを確保するために設けられた措置である。州民に高等教育へのアクセスを確保するこの理念と方法は賞賛すべきであるが，他方，世界最高峰の研究型大学であるカリフォルニア大学からすると，大学自身で定める基準に合致する学生を選抜する自由度がなくなるため，他の有力大学に比べてハンディを負っている。

学部教育の負担という州立大学の宿命

州立大学の行く末

カリフォルニア大学バークレー校の例からもわかるように，州立大学は州の規則や経済，社会環境に応じた対応を求められるなど，大学運営において私立大学とは異なりさまざまな制約を受ける。米国の一部の有力私立大学が大学基金など巨大な財力を背景に，優秀な教員・学生を獲得，躍進するなか，州立大学は相当に苦しい戦いを強いられている。カリフォルニア大学バークレー校でインタビューをした際，「州立大学はゴミ回収車とも言われている。ゴミ回収車は社会に必要だけど，誰もありがたがらないだろう？」と自虐的なセリフまで聞いた。

しかし，過去にはカリフォルニア大学バークレー校は世界じゅうから羨望の目で見られる優れた研究型大学であった。今でも決して手を抜いている訳ではなく，高等教育の基盤をなすカリフォルニア高等教育マスタープランの上に，堅実な教育研究活動を行っている。このようにして創りあげてきた大学が，財力の関係で堕ちていくのは残念ではないだろうか。

カリフォルニア大学バークレー校の恩師に，教員の引き抜きについて聞いた。すると，「ああ，ボストンに来ないかという声は僕にだってよくかかるが，僕はここを離れる気はない。家族もあるし，なによりカリフォルニアの気候と自由な雰囲気は最高じゃないか」。

カリフォルニア州の抜けるような青い空に燦々と降りしきる太陽，その気候の恩恵を受けた果物や野菜，そしてなんといっても自由でおおらかな人々，そんなカリフォルニア州の魅力に期待したい。 ■

（出典）New York Times, "Little Asia on the Hill", (2007.1.7)

この記事は参考になりましたか？ご意見をお聞かせください
※ご使用の環境によってはセキュリティ警告が表示される場合がございます
ご意見・ご感想フォームを開く